〔研究ノート〕

ローカルプロスポーツのビジネスモデルに関する一考察

――「地域密着」型から「国際化」戦略へ――

石　原　豊　一

はじめに
1. 研究の背景
2. 日本における独立プロ野球リーグの外国人選手の歴史
3. 日本プロ野球独立リーグの外国人選手獲得の現状
3-1. リーグ管理の下での外国人選手獲得戦略：四国アイランドリーグ plus
3-2. 各球団独自の国際戦略からリーグ挙げてのグローバル戦略へ：BC リーグ
3-2-1. 野球新興国からの選手受け入れというビジネス：群馬ダイヤモンドペガサスの事例
3-2-2. 必要最低限の戦力補強としての外国人選手獲得：富山サンダーバーズの事例
4. 国際化戦略という生き残り策：石川ミリオンスターズ
4-1. 石川球団の外国人選手獲得戦略
4-2. 国際化によるマーケットの拡大策
おわりに

はじめに

プロ化を伴ったスポーツのグローバルな拡大の中，スポーツ競技を生業として越境するアスリートの数は，急増している。その結果，プロアスリートの競技レベルの下限低下が各競技で起こり，低賃金でスポーツという労働にたずさわるこれらのアスリートを利用したビジネスも興りつつある。

例えば，野球においては，北米のメジャーリーグベースボール（MLB）を頂点にいただく各国リーグの資本，選手の移動を通じたネットワークが構築され，そのネットワーク全体も，これまで野球の普及が進んでいなかった地域にまで広がりつつある。その結果，上位リーグへの選手送出を目的とする新興プロ野球リーグが世界各地に興り，そこでは，従来プロとしてプレーのかなわなかったようなレベルのアスリートまでもが，プレーするようになってきている（石原：2013a）。

野球の本場，北米においては，国際化戦略が成功し高額な報酬をもって世界中から好選手を集めるようになった MLB がぜいたくな娯楽となる中，独立プロ野球リーグ（以下独立リーグ）が日常の気軽な娯楽としてのビジネスに活路を見出した（石原：2011）。しかし，日本においては，こ

れがスペクテイタースポーツビジネスとしての地位を確立したとは言いがたい。2005 年の四国アイランドリーグ（現四国アイランドリーグ plus，以下アイランドリーグ）発足以来，リーグ・球団数は増加したが，観客数は横ばい，もしくは減少傾向にある。そのような中でも，黒字化を達成する球団が年々増えているのは[1)]，そのビジネスモデルが，試合興業での入場料収入と物品の販売を柱としたモデルから，地元企業からのスポンサー収入や試合会場での自治体からの業務委託費を受け取った上での広報活動など地域密着型の公共財として収入を多様化させるモデルに変容を遂げていることが要因のひとつとして考えられる（石原：2012a）。

本稿では，このような小規模プロスポーツの持続的発展の一方策として，日本の独立リーグにおける国際化戦略に着目する。

1990 年代以降に発足した世界各地のプロ野球が，北米の MLB や日本・韓国・台湾などの各国のトップリーグのファームリーグとしての役割を担っている中（石原：2008，2012b，2013b），上位リーグに選手を送出することは，リーグの価値を高め，新たなビジネスモデルとなる可能性をもっていることや，「地域密着」とは対極にある国際化戦略が小規模プロスポーツにおいても事業展開の有効なツールになる可能性をもっていることを，以下の事例から論証していきたい。

1. 研究の背景

スポーツの技能を携えて国境を渡るスポーツ労働移民に関する研究は，Bale & Maguire（1994）を端緒にこれまで多くなされてきた。Chiba（2004）などが語るアスリートの越境の主要因は，金銭という経済的なものに求められることが多かったが，近年では Agergaard（2008）に代表されるような，競技の継続など経済的なもの以外の要因も指摘され始めている。

このように，スポーツ労働移民に関する研究は，社会学的な視点からなされるものが多かったが，これがスポーツビジネス，あるいはスポーツマネージメントの視座から分析されることは少なかった。グローバル化が進む現在，アスリートの越境は当該競技のトップレベルにおいてのみ起こるものではなくなってきている。石原（2013a）は，野球において，北米トップリーグである MLB を頂点とする各国リーグの人材獲得のネットワークが拡大した結果，世界各地に上位リーグへの人材育成の役割を担う競技レベルの比較的低い新興のプロリーグが勃興し，従来であるならアマチュアレベルでしかなかった野球選手がプロとしてプレーする環境ができあがったことを指摘している。このような新興プロリーグのひとつが独立プロ野球リーグである。MLB の国際化戦略が本格化した 1990 年代中葉に北米で興ったこの小規模プロ野球は，その後，2000 年代中葉に日本でも開始され，2012 年には，韓国でも単独チームが，既存のプロリーグのファームチームと対戦するというかたちで活動を開始した。このようなリーグもしくはチームは，1990 年代以降に興った中南米カリブ地域やオーストラリアの冬季リーグ，イタリアのプロ野球リーグとともに，トップレベルには到達できない野球選手の雇用の受け皿となっている。

しかし，このような新興リーグを取り巻く経営環境は厳しい。北米や日本の独立リーグ，球団が倒産，消滅することは珍しいことではないし，中南米カリブ地域の冬季リーグはたびたびリーグ戦がキャンセルされている。とりわけ，トップリーグに達しないマイナーリーグを娯楽とする習慣が根付いていない日本においては，独立リーグの経営は未だ困難な状態にあると言える。

このような経営環境の中，グローバル化という現象を小規模プロ野球というスポーツビジネスにどのように活かすべきなのかについて，以下ではいくつかの事例を取り上げる。

2. 日本における独立プロ野球リーグの外国人選手獲得の歴史

プロスポーツの国際化が，最も目に見えるかたちで表れるのは，外国人選手の獲得であろう。日本に独立プロ野球リーグが誕生したのは 2005 年のことである。このとき発足したアイランドリーグは，日本の若者に「プロ野球選手」（＝日本プロフェッショナル野球組織〔以下 NPB の契約選手〕）という夢への挑戦の場と野球競技継続の場を与えるという理念の下，当初はプロ経験者や外国人選手は受け入れなかった。

しかし，アイランドリーグは 2006 年になると，プロ経験のない韓国人選手を採用した。そして翌 2007 年からは韓国プロ野球の元選手を入団させ，またドミニカ共和国（以下ドミニカ）にある NPB 広島球団の野球アカデミーの選手を受け入れるなど，次第に外国人選手に門戸を開くようになっていった。

2007 年に発足した北信越ベースボールチャレンジリーグ（現 BC リーグ，以下同じ）も，1 年目は日本人選手だけでリーグ戦を始めたが，翌年からは韓国人選手やアイランドリーグを退団した南部アフリカのジンバブエ出身選手を受け入れ，国際化の波に乗った。

2009 年には，アイランドリーグの徳島球団でプレーしていたカープアカデミー出身のドミニカ人投手ディオーニ・ソリアーノが，広島球団と育成選手契約を結び[2]，高知球団が独自ルートでベネズエラから選手を獲得するようになるなど，独立リーグの選手獲得網の国際化は加速した。この年，高知球団が獲得したベネズエラ人フランシスコ・カラバイヨはその打力で日本人選手を圧倒し，翌年 2010 年には移籍した BC リーグの群馬球団経由でオリックス・バファローズに入団すると，日本の独立リーグ経由での「助っ人」獲得ルートが注目されるようになり，また，「ジャパニーズ・ドリーム」を実現すべく多くの外国人選手が独立リーグを目指して来日するようになった。また，2009 年に発足した関西独立リーグは，韓国人選手を積極的に受け入れ，翌 2010 年には，学卒後の競技継続の場の少ないこの国の選手の受け皿として，韓国人選手により構成されるコリア（韓国）・ヘチ球団がこのリーグに加入した。

その後もこの潮流は変わらず，2012 年も，独立リーグ球団への外国人選手入団が相次いだ。シーズン途中には，群馬球団にドミニカ人投手フランシス・ベルトランが入団したが，これは，

外国人選手では初の元メジャーリーガーの独立リーグ加入の事例となった[3)]。

3. 日本プロ野球独立リーグの外国人選手獲得の現状

2012 年シーズンにおいて日本の独立リーグでプレーした外国人選手は，表 1 のとおりである。実にのべ 43 人の外国人選手が日本の独立リーグでプレーした[4)]。

以下では，現在においてプロ野球興行というスポーツビジネスにおいて，地球規模の人材獲得網のネットワークが構築され，拡大する中，小規模の新興プロ野球においてもスポーツ労働移民の移動が起こり，その移動を通じて競技継続や上位リーグへの上昇を可能にするアスリートと，それをビジネスのツールとして利用する球団やエージェントの活動が活発化している現状を紹介，分析する。

3-1. リーグ管理の下での外国人選手獲得戦略：四国アイランドリーグ plus

2012 年シーズンにおいてアイランドリーグでプレーした 14 人の外国人選手のうち 8 人は，リーグが日本人エージェントを通して契約したものである。各々の選手の所属は，獲得後，所属 4 球団によるウェーバーによって決められた。つまりアイランドリーグは，外国人選手の獲得をリーグの戦略上に位置づけているのである。

その目的は，リーグのレベルアップと獲得してきた外国人選手の保有権を NPB 球団へ譲渡する際の移籍金収入である。

リーグ主導で獲得してきた選手は全員，前年は北米のプロリーグでプレーしていた者である。その中には MLB 傘下のマイナーリーグで最高ランクの 3A に位置づけられるメキシカンリーグに在籍していた者もいた。

選手の多くが，NPB のドラフトにかからなかった選手で構成されている独立リーグのレベルは[5)]，NPB のすぐ下の下部リーグというより，NPB に多数の選手を輩出する社会人企業チーム，大学野球の下に位置していると言ってよい。このようなリーグに，マイナーとは言え，層の厚い北米プロリーグ出身者が参入してくることは，日本人選手にとって大きな刺激となることは想像に難くない。実際，指導者サイドも，外国人選手の参入によって日本人選手の競技力が上がったことを認めていた[6)]。

2 つ目の目的である移籍金ついて言えば，現在，アイランドリーグと BC リーグで構成されている独立リーグ協議会は，NPB と選手移籍に関する協定を結び，ドラフト対象でない外国人選手，元 NPB 選手について独立リーグから NPB へ移籍する際には，移籍金が支払われること

表１：日本独立リーグにおける外国人選手（2012）

球　団	名　　前	出身国	経　歴　そ　の　他	備考
四国アイランドリーグ plus				
香　川	アレックス・マエストリ	イタリア	イタリアセミプロ→マイナー（2A）→北米独立→豪州冬季リーグ	○
	アンソニー・プルータ	アメリカ	マイナー（A）→北米独立	○
	ウィルバー・ペレス	ドミニカ	マイナー（A）→北米独立	○
愛　媛	デイビッド・トラハン	アメリカ	マイナー（2A）→メキシカンリーグ	○
	ブレッド・フラワーズ	アメリカ	米独立	○
徳　島	ジェイソン・ノーダム	アメリカ	マイナー（3A）→北米独立	○
	アレックス・コーワート	アメリカ	米独立	○
	レヒナル・シモン	ドミニカ	マイナー（A）→広島カープアカデミー	
	オナシス・シレット	ドミニカ	広島カープアカデミー	
	ホセ・バレンティン	ドミニカ	広島カープアカデミー	
高　知	チャーリー・ウェザビー	アメリカ	マイナー（2A）→北米独立	○
	ラファエル・マルティネス	ドミニカ	社会人クラブチーム	
	ルイス・ゴンザレス	プエルトリコ	マイナー（2A）→北米独立→ NPB →台湾プロ	
	孫一凡（ソン・イーファン）	中　　国	日本高校卒	
BC リーグ				
新　潟	郭恆孝（かく・ここう）	台　　湾	日本高校（野球留学）	
	ロバート・ブース	日　　本	マイナー（A），日米ハーフ	
群　馬	フレデリック・ハンビ	フランス	マイナー（ルーキー級）→フランスアマリーグ	
	フェリックス・ブラウン	フランス	フランスアマリーグ	
	フランシス・ベルトラン	ドミニカ	MLB →メキシカンリーグ→北米独立→マイナー（3A）	
	ロバート・ストレッカー	アメリカ	米独立	
	ウィルフレッド・ラミレス	ベネズエラ	マイナー（A）→関西独立リーグ	
	アルベルト・オドレマン	ベネズエラ	マイナー（A）→関西独立リーグ	
	ベルナルド・ソラルテ	ベネズエラ	マイナー（ルーキー）→関西独立リーグ	
	フランシスコ・アポンテ	ベネズエラ	ベネズエラ高校→関西独立リーグ	
	エスピノサ・アレキシス	ベネズエラ	マイナー（A）→関西独立リーグ	
信　濃	アーロン・キロス	ベネズエラ	マイナー（A）→関西独立リーグ	
	カルロス・テラン	ベネズエラ	イタリアセミプロ	
	マルコス・ベキオナチ	ベネズエラ	マイナー（2A）→ NPB	
富　山	ワネル・メサ	ドミニカ	ドミニカサマーリーグ（ルーキー）→マイナー（A）→北米独立	
	ジャスティン・ジャスティス	アメリカ	マイナー（2A）→北米独立	
	ジョニー・セリス	ベネズエラ	マイナー（ルーキー）→関西独立リーグ	
	ホセ・カンポス	ベネズエラ	マイナー（A）→関西独立リーグ	
	クリス・ブラウン	アメリカ	北米独立	
	フレディ・バイエスタス	ベネズエラ	マイナー（A）→北米独立→ NPB	
石　川	サンディー・マデラ	ドミニカ	マイナー（3A）→メキシカンリーグ→メキシコ冬季リーグ	
	スティーブン・ハモンド	アメリカ	マイナー（3A）→北米独立→台湾プロ	
	ンベルト・エスピノサ	ベネズエラ	ベネズエラサマーリーグ（ルーキー）	
	エドウィン・アセベド	ドミニカ	ドミニカサマーリーグ（ルーキー），試合出場なし	
	ヤコブ・スラディック	チ　ェ　コ	ドイツセミプロリーグ→マイナー（ルーキー）→チェコアマリーグ	
	ウィリアンス・バスケス	ベネズエラ	マイナー（A）→イタリアプロ→ニカラグア冬季リーグ	
	マービン・ベガ	コロンビア	マイナー（2A・メジャー契約）→コロンビア冬季リーグ	
	ホワン・アリッサ	コロンビア	コロンビア冬季リーグ	
福　井	ガラニン・ヤン	ウクライナ	日本育ち	

＊アイランドリーグの備考欄の○印は，リーグ指定のエージェントを通しての契約
「マイナー」は MLB 傘下のファーム。その後の（ ）内はプレーした最高レベル

を取り決めている。その結果，外国人選手の育成とNPBへの送出が，独立リーグ球団の新たな収入の途として考えられるようになった。

従来も，独立リーグ選手がドラフトで指名されると，指名された選手から個々の契約金に応じて規定の金額がリーグに入ることにはなっていた。しかし，現実には，独立リーグからドラフト指名される選手は決して多くなく，その上指名される選手のほとんどは下位での指名で，したがって契約金も少ない。さらに育成指名選手に至っては，少額の「支度金」しか入団時に出されず，ドラフトから漏れた日本人選手を育て，NPBへ送り込むというリーグのあるべき姿に固執すると，選手の育成に対するNPBからの収入は，多くを見込めないことになる。

外国人選手送出による移籍金をもくろんだ組織的な外国人選手獲得策という2012年から本格的に始まった試みは，早くも結果が出ている。香川球団に在籍していたアレックス・マエストリが前期シーズン終了後にNPBオリックス球団と契約し，シーズン終盤には一軍の先発ローテーションにも入ったのである（写真1）。

写真1：2012年シーズン途中，香川オリーブガイナーズからオリックス・バファローズに移籍したイタリア人投手アレックス・マエストリ

イタリア生まれのイタリア育ちという「生粋のイタリア人」である彼は[7]，まだプロリーグがなかった母国イタリアのアマチュアリーグ・セリエAでデビューし[8]，2006年のWBCでMLBのスカウトに見出され，この年から5年間，シカゴ・カブスのマイナーチームでプレーした。その後，カブスとの契約を解かれ，2011年は北米独立リーグとオーストラリアの冬季プロリーグでプレーし，ここでリーグ関係者から日本行きを勧められたことをきっかけに，このリーグ関係者とつながりのあるエージェントを介してアイランドリーグでプレーすることになった。

オリックスでマエストリが手にした年俸は220万円だという。本稿執筆時にはまだ明らかにはなっていないが，オリックス球団はマエストリとの契約更新の意思を表しており，その報酬が跳ね上がるのは間違いないであろう。先発ローテーション投手を育成費なしで獲得できたオリックス球団にとっても，NPBへの外国人選手育成という新たなビジネスモデルを模索している独立リーグにとっても，より報酬の高いプレーの場を求めている選手の側にとっても，この事例はプラスをもたらした。彼の活躍次第では，今後この外国人選手育成というビジネスモデルが独立リーグの新たな収入の柱になることが期待できる。

3-2. 各球団独自の国際戦略からリーグ挙げてのグローバル戦略へ：BCリーグ

アイランドリーグが，リーグの管理の下，プロ経験のある外国人選手を獲得しているのに対して，BCリーグは各球団の企業戦略に基づく外国人獲得策を実施している[9)]。このため，各球団の外国人選手の獲得数には非常にばらつきがある（表1）。

新潟，福井球団が基本的に外国人選手の獲得を行わないことは表からも窺える[10)]。両球団の3人はすべて，ルール上NPBのドラフトの対象となる「日本人選手」である。

それに対して，群馬の9人，石川の8人という数は，このリーグの外国人獲得策が各球団の裁量にゆだねられていることを示している。以下と次章ではこの両球団と富山球団に関して，その事例を挙げ，分析していく。

3-2-1. 野球新興国からの選手受け入れというビジネス：群馬ダイヤモンドペガサスの事例

BCリーグで最初に外国人選手を受け入れたのが群馬球団である。リーグ2年目の2008年に韓国人選手を獲得したのがその始まりである[11)]。その後も群馬球団は，毎年外国人選手を採用しており，外国人選手の受け入れには積極的な球団であると言える。

2012年シーズンは，のべ9人の外国人を採用したが，そのうち，シーズン開幕時に在籍していた2人のフランス人選手は野球の普及度の低い国からの獲得例という点で，特異なものであると言える。

2人はともに2011年シーズンはフランスのアマチュアリーグでプレーしていた（写真2）。1人は，野球の盛んなカリブ海にあるフランス領サンマルタン出身者で，もう1人はMLBのヨーロッパ・アカデミーに参加し，その後メジャーリーグ球団傘下のマイナーリーグでのプレー経験をもっていた。国内リーグでのプレーを，同じリーグの別のチームに所属していた日本人の選手兼コーチに見出されたことがきっかけで，その人物がかつて所属していたBCリーグの公開トライアウトを受けることになり，その結果群馬球団との契約に至った。

写真2：群馬ダイヤモンドペガサスに入団したフランス人選手
フェリックス・ブラウン（左）とフレデリック・ハンビ（右）

2人の独立リーグ挑戦についてはフランス野球ソフトボール連盟

の後押しもあったという。フランスは第3回WBCに2012年秋に開かれる予選大会から参加することが決まっていたのだが，これに備えて代表チームの強化が必要になっていたことが背景にはある。そのために，国内リーグよりレベルの高い場で選手を育成する必要が出てき，このため，2人を日本の独立リーグに送り込む話が先述の日本人指導者を通してもち上がった。そのため，トライアウトに際して，連盟は2人の日本までの渡航費を負担し，群馬球団との契約の際にも渡航費負担を申し出た。

受け入れ側の群馬球団にとっては，2人の獲得は半ば常態化している「エージェントから売り込み」の延長線上にあったに過ぎない。ただし，保有人数に制限のある外国人選手に戦力としては未知数のフランス人選手を獲得することを決めたのは，単なる戦力以外のメリットをそこに見出したからである。

〈受け入れ側の意図〉

群馬県とフランスは，県内に拠点を置く企業がフランスに工場をもっていたり，逆にフランス企業の工場がかつてあったりという縁で両国の交流親睦団体である日仏協会が置かれている。

そのような土地柄，球団の営業戦略としてフランス人選手を獲得することにメリットを見出したことが「プレーは大学生レベル」[12)]の2人の受け入れにつながった。

球団は，彼の獲得を純粋な戦力としてではなく，日仏の文化交流の一環としての選手受け入れだとする。加えてこの「文化交流」は，外部に向けチームの存在価値をアピールするツールになるという[13)]。

現在，独立プロ野球リーグを取り巻く厳しい環境の中，ほとんどの球団は赤字決算を余儀なくされている。そこで，この小規模プロ野球を一種の「コミュニティビジネス」として，地域にアピールし，公共財とみなす視点から公共団体の支援を受ける方向性が示されているが（石原：2012a)，群馬球団も，このアスリートを通じた文化交流というフランス人選手の受け入れを，スポンサーの獲得や公共団体からの支援につなげようというプランをもっていた。

さらに，球団は選手の受け入れそのものもビジネスにする構想ももっていた。つまり，選手の受け入れを有料化し「プロ経験」を商品化しようというのである。

1990年代以降，MLBを頂点とする人材獲得網，マーケティング網が世界規模で拡大しているが，この結果，野球は従来普及の進んでいなかった地域へも拡大を遂げている。その潮流を考えると，自国の野球発展を目指す野球後進国の野球協会などから有料で選手を受け入れ，独立リーグとは言え，「プロ」を体感させることはひとつのビジネスとしての可能性をもっている。

このようなかたちで受け入れた選手も，戦力とみなされなければ，試合に出場させることは難しい。しかし，ペナントレースに影響を及ぼさない範囲において，試合の勝敗が半ば決まった時に若手育成という観点から補欠選手を試合に出場させるのと同じような感覚で，野球途上国からの受け入れ選手を起用することは不可能ではない。無論，これには現場の指導者の理解を求める必要があるが，ベンチ入り選手の一部を野球後進国から有料で受け入れることは，球団の収支改

善にも，野球を通じた人的交流という球団に付加価値をつけるツールとしても，有効な方策ではある。

3-2-2. 必要最低限の戦力補強としての外国人選手獲得：富山サンダーバーズの事例

富山球団は，のべ6人の外国人選手を獲得した。この球団の外国人選手獲得も，球団側の必要というよりむしろ外部からの売込みによるところが大きかったという。シーズン開幕時の登録外国人は2人。ともにエージェントがもってきたオファーを富山球団が受け入れたものである。

しかし，富山球団の見解では，外国人選手獲得の要因として，戦力アップや観客動員の増加や移籍金の優先順位は低いというものである。

その理由は以下のとおりである。まず，戦力面を考えると，そもそも現在の独立リーグの給与レベルでは，戦力として大きな期待を寄せるほどの外国人選手を獲得するのは難しい。実際，2012年シーズンに採用した米国人選手のひとりは，来日後，契約の細部をめぐって球団と争い帰国している。現在のところ，とくに米国人のような先進国からの外国人選手を満足させられる環境を日本の独立リーグは提供していないことが，この事実から窺える。

そして，観客動員面を考えても，富山という保守的な土地柄から，外国人選手の採用に関して，ファンやスポンサー獲得に大きなメリットはない[14)]。

そのような中，富山球団が外国人選手の獲得に踏み切ったのは，「日本人選手への刺激」が理由のひとつである。外国人選手のひたむきな姿勢が，若い日本人選手の精神面に正の影響を与えると言うのである。

実際，球団が外国人選手に支払う報酬は日本人選手に支払うそれと変わるところはない。しかし，彼らの来日に関わる航空券代などの費用を球団がもつ分，外国人選手の獲得にはコストがかかる。そのコストを考慮に入れても，プロ経験をもつ外国人選手，とくに途上国であるラテンアメリカ出身の選手は，ハングリー精神を日本人選手に伝えるという点においても，球団にとってメリットがあると言う[15]。選手呼び寄せにかかる航空運賃という点においては，これが必要ない国内の関西独立リーグからベネズエラ人を2人獲得し，シーズン終了前に元の所属球団に返すという「レンタル移籍」で外国人を補充している[16)]。

〈「上昇移動」のツールとしての独立プロ野球リーグ：ドミニカ人選手ワネル･メサの事例〉

一方，入団してくる外国人選手にとって，日本の独立リーグが，野球におけるアスリートのグローバルな移動フロー回路中における上昇移動の経由地になっていることは，以下のドミニカ人選手ワネル･メサのストーリーに表れている（写真3）。

2012年シーズンで25歳になるメサは，19歳でMLBワシントン･ナショナルズと契約金5万ドルで初めてプロ契約を結んだ。16歳からプロ契約を結ぶことができ，MLBのすべての球団が野球アカデミーをもつドミニカにおいては比較的遅いプロ入りである。

2006年から3シーズンはルーキー級のドミニカンサマーリーグでプレー，この開催期間わずか

写真 3：2012 年シーズンを富山サンダーバーズで過ごしたドミニカ人選手ワネル･メサ

3 カ月のリーグでは，月 1200 ドルを受け取っていた。その後，2009 年にアメリカへ渡り，シーズンの長い A 級リーグに昇格し，月 1300 ドルでプレーした。そして，この年のオフシーズンからはメジャーリーガーもプレーするドミニカ冬季リーグのチームとも契約するが，球団の保有選手名簿には名を連ねたものの，ベンチ入りメンバーに入ることはできず，結局ここでは報酬を手にすることができなかった。そして 2011 年，彼は春季キャンプ中にナショナルズを解雇されてしまい，その後は北米独立リーグの球団と契約し月 1000 ドルでプレーすることになった[17)]。

2012 年シーズンに先立って，彼のエージェントがまずは NPB ソフトバンク球団に彼を売り込んだ。層の厚い北米では，マイナー契約を解かれ独立リーグでのプレーを余儀なくされている彼が，再び MLB 球団との契約にこぎつけ，そこでキャリアを上昇させていくのは難しい。しかし，北米に比べ選手層の薄い日本でなら，150 キロの速球をもつ彼の技量は，トップリーグの NPB 球団にも十分魅力のあるものだと考えられたからである。しかし，春季キャンプ中のテストで制球難が露呈し，結局は不採用になった。ここで一旦彼はドミニカに帰国するが，彼の情報を得た他の BC リーグ球団の指導者から話を聞いた富山球団が彼のエージェントと接触し，獲得を決めた。

このストーリーから読み取れることは，日本の独立リーグをステップアップの場と捉える選手と，ビジネスをアメリカ大陸外に拡大するエージェント，それに，安価な外国人選手を求める独立リーグ球団である。

10 数万円の報酬を手にすることができるが[18)]，住居費，食費などはすべて自弁である日本の独立リーグの待遇は，多くの場合無償のホームステイ先が用意され，遠征時にはミールマネーと呼ばれる食費が支給される北米のそれと比べると，彼が前年に手にしていた月 1000 ドルという報酬と考え合わせても，決していいものとは言えない。にもかかわらず，彼が来日したのは，トップリーグのレベルがアメリカと比べて低く，選手層も薄い日本の方が，自己のステップアップの場として期待がもてると自身が考えたからである。このことは，彼自身が，来日の理由を，NPB や MLB とのより良い契約を勝ち取るためであり，最終目標はあくまで MLB でのプレーであるとしていることによって裏付けられる[19)]。

4. 国際化戦略という生き残り策：
石川ミリオンスターズ

BCリーグの中でも，最も早く，かつ明確に国際化戦略を打ち出したのが石川球団である。採用した外国人選手の総数では群馬球団に及ばないものの，石川球団は，2012年シーズンにのべ8人の外国人選手と契約した。これに加えて，この球団は「日米独立リーグ交流戦」として北米独立リーグ・ノースアメリカンリーグのマウイ・イカイカとの試合興行を，7月に米国ハワイ州で，9月に本拠地の金沢で2試合ずつ実施した。

また，BCリーグは2011年のオフシーズンに，コロンビア冬季リーグに選手を送り出したが，これも石川球団の国際化戦略の下でもち上がった話から実現したものであった。

4-1. 石川球団の外国人選手獲得戦略

石川球団は，2011年シーズンから開始した外国人選手獲得の意図を以下のように示した。

1. 戦力の充実，2. リーグの競技力向上，3. 観客動員増，4. 移籍金収入

1，2について言えば，トップレベルでも日本人選手は国際的視点に立てば，長打力が弱点であると指摘されることが多い中で，独立リーグレベルになると，その傾向は顕著である。2011年シーズンのBCリーグの1試合あたりの平均本塁打数は0.8。この中では，勝敗において長打力を備えた打者の重要性は高いと言えるだろう。そのため，石川球団が2012年シーズンに迎え入れた外国人選手は，北米プロ野球でのプロ経験豊富な者が多かった。

その代表であるドミニカ人選手のサンディー・マデラは，マイナーリーグ最高レベルのAAA級でのプレー経験をもち，来日直前までプレーしていたメキシコ冬季リーグ・メキシカンパシフィックリーグでは，現役メジャーリーガーも参加する中，首位打者にも輝いていた。また，前年プレーしていたAAA級にランキングされるメキシカンリーグでは，19本塁打を放っている。彼は，このメキシカンリーグで手にしていた報酬より少ないにもかかわらず，石川球団と契約を結んだという。彼同様，前年度イタリアプロリーグで本塁打王に輝いたベネズエラ人選手ウィリアンス・バスケス（登録名ウィリー）も，前所属球団のサンマリノからのより良いオファーを断って石川球団と契約している。

その理由が，前述のイタリア人投手アレックス・マエストリの例が示すように，トップリーグへの昇格が，北米に比べ容易であると彼ら外国人選手に認識されていることは想像に難くない。

3について考えてみる。彼らのようなプロ経験豊富な選手の加入は，当然，従来までいた日本人選手の技能向上にも役立つ。しかし，このことが独立リーグというプロ野球ビジネスにおいて，決して正の効果を及ぼすものではないことは，先述の富山球団の外国人選手獲得方針が示し

ている。実際，筆者が行った調査においても[20]，観客のほとんどは外国人選手の増加によって競技力が上がったことは認めたが，その一方でひいきにしていた選手の出場機会が減少することに関しては否定的な見解を述べていた。つまり，球団のもくろむ2のリーグのレベル向上と3の観客動員の増加は現在のところ，両立することは難しいと言える。

4について言えば，石川球団の国際化戦略もまた，アイランドリーグ同様，独立プロ野球球団の新たな収入源として，外国人選手や元NPB選手がNPBへ移籍する際の移籍金を期待していることがわかる。

石川球団で2012年シーズン通じてプレーした唯一の外国人選手スティーブン・ハモンド投手は，台湾プロ野球でプレーしたこともある。彼は，石川でのシーズン後，オリックス球団の秋季キャンプに参加し，年俸800万円（推定）で翌シーズンの選手契約を勝ち取った。NPBから見れば低コストでしかない金額は，彼がプレー経験した中米カリブ地域の冬季リーグでの月給が600〜1000ドル[21]と夏のマイナーリーグや独立リーグでの報酬を考えれば，非常にいい条件であると言える。先述した富山球団の米国人選手は，日本の独立リーグの待遇に満足しなかったが，ハモンドは，日本の独立リーグをステップアップの場と割り切り，NPBへの道を切り開いたといえる。

このようなトップマイナーリーガーの獲得とともに，石川球団はまた，群馬球団同様，「野球不毛の地」からの選手獲得も行なっている。

チェコ人のヤコブ・スラディックは，17歳でフィラデルフィア・フィリーズと契約し，その後フィリーズからドイツのセミプロリーグに派遣され，2009年に渡米してルーキー級でプレーした経験をもつ。しかし，野球の本場，米国では芽が出ず，2010年からはチェコ国内のセミプロリーグでプレーしていた程度の選手である（写真4）。この選手をわざわざ獲得する意味は，戦力としてやNPBへの選手送出という意味以上に，「話題作り」という側面が強い。これは，群馬球団のフランス人選手獲得にも通じるものがある。BCリーグでもポジションを奪うことなく，スラディックは2012年シーズン途中に自由契約になって帰国するが，その後，秋に行われたWBC予選にチェコ代表の主力打者として出場している。WBC代表といえばMLBやNPBのトップ選手がなるものと一般には認識されているが，野球後進国においては代表チームでもマイナーリーグレベルの選手の集まりということになる。こういう層の選手を獲得し，実際に

写真4：2012年に石川ミリオンスターズでプレーし，WBC代表選手にもなったヤコブ・スラディック

は今回はそうならなかったものの，彼らがWBCの本戦で活躍すれば，(旧)所属球団にとってもいい宣伝になる。つまり，石川球団は「国際化」という球団の方針をスポンサー獲得のツールとして利用しようとしているのだ。

4-2. 国際化によるマーケットの拡大策

「独立リーグが生き残るための当然の戦略」[22]として国際戦略を位置づける石川球団は，外国人選手の獲得だけにとどまらず，選手のコロンビア冬季リーグへの派遣と北米独立リーグ球団との国際交流戦という事業も手掛けている[23]。

現在の日本の独立リーグビジネスは，スポンサー頼みと言っても過言ではない。発足7年目を過ぎ，目新しさがなくなってきていることもあり，観客動員は年々下降気味である。にもかかわらず年々各リーグ，各球団の収支が改善の方向に向かっているのは，経費節減などの企業努力に加え，収入の柱としてのスポンサー獲得戦略が成功しているからだと言える。

BCリーグ当局は，地域密着策により地元スポンサーを継続的に募っていくというビジネスモデルは軌道に乗ったとしている[24]。また，2011年度決算において，観客動員はリーグ最下位ながらも黒字化を達成したアイランドリーグ･高知ファイティングドッグスも，収入の柱を「地域貢献としての地元スポンサー」と位置づけている[25]。

しかし，石川球団はこれらの楽観論には異を唱える[26]。BCリーグ発足5年を経て，すでに地元スポンサーはこれ以上見込めないというのが石川球団の見解である。つまり国際化戦略は，従来に比べ広範囲にスポンサーを募るための方法論であるのだ。

リーグの前期シーズン終了直後に実施された国際交流戦のハワイ･ラウンドでは，世界規模にネットワークをもつ共同通信がこれを取材し，日本の報道各社へニュースを配信した。このような中央発信の全国規模の報道はスポンサー獲得の上では非常に重要であると石川球団は考えている。まずは話題作りをし，それをキャッチアップした中央での反応が全国へ流通されると，地方でのブランド構築につながるというのが，国際化戦略の目的である[27]。

ちなみに，今回実施した国際交流戦は，興行権はすべてホームチームがもち，経費もホームチームの負担であった。つまり，石川球団がハワイへ行った際の経費はすべてマウイ球団が負担し，マウイ球団が金沢に来た際の経費は，石川球団が負担した。金沢での2試合の興行で石川球団は，合計1760人（第1戦930人，第2戦830人）しか観客を集められなかったのにもかかわらず，広告収入によって興行全体は黒字となった。「国際交流戦」のうたい文句がスポンサー獲得に一役買ったのである。

移動経費などの関係から，どうしても地域リーグにならざるを得ないマイナーリーグビジネスだが，石川球団はあえてこの枠組みを壊し，国際性をアピールすることで停滞気味の独立リーグビジネスの起爆剤にしようとしている様がここから窺える。

コロンビア冬季リーグへの選手派遣も同じ理由によるものである。外国人獲得の中でつながり

ができたエージェントからの提案に始まったこの派遣プランにおいては，5人の枠が石川球団にあてがわれたのだが，実施初年度の2011–12年シーズンにおいては，石川球団からの希望者がいなかったために，他球団から希望者を募り，新潟球団から4人，富山球団から1人の計5人をコロンビア冬季リーグへ送り込んだ[28)]。

選手にはコロンビア側の球団から住居が提供され，月給1500ドルが支払われた[29)]。但し，渡航費は自弁で，給与の支払い単位である2週間毎の査定次第では解雇もありうるという不安定な短期雇用であった[30)]。しかし，このリーグに参加したメジャーリーガーとのプレーやMLBのスカウトも来訪する環境は，上位リーグへのステップアップを目指す彼らにとって大きなメリットになるし，実戦トレーニングを積みながらの雇用は，独立リーグの選手にとって，ある意味で最適な冬季の雇用の場ともなりうる。

石川球団は逆に，シーズン途中に退団し日本を離れた外国人選手に代わって，2人のコロンビアリーグの選手を受け入れた。彼らの獲得が戦力補強というよりも，コロンビア側との提携の一環としての色彩が強いことは，球団関係者も認めている[31)]。このような国外リーグとの提携は，リーグ・球団の国際性をアピールするツールになるのである。

おわりに

以上，本稿では近年興ってきた小規模スポーツビジネスとしての独立プロ野球リーグが，グローバル化の進展の中，ビジネスの持続的安定の手段として，従来言われてきた地域密着型のビジネスプランに加えて国際化戦略を模索していることを紹介した。その手段として挙がってきているのは，外国人選手の獲得策とそれに伴ったオフシーズンにおける選手の冬季リーグへの派遣，それにリーグそのものの国際化をも念頭に置いた国際交流試合の実施であった。

外国人選手の獲得については，北米でのプロ経験のある選手の獲得策とプロリーグのない地域からのトップ選手の受け入れ策とに大別できる。前者については，リーグのプレーレベルの向上が見込まれる他，トップリーグであるMLBに登りつめるまでに厳しい競争が待っている北米プロ野球において，実力がありながらも機会に恵まれない選手の上昇移動の手段としての需要を，独立リーグが，MLBに比べ選手層の薄いNPB球団との契約に関わる移籍金という新たな収益の手段につなげようとする現状が窺えた。また後者については，野球の国際的普及が進む中，より高いレベルでプロとしてプレーしたいという野球後進国の選手の需要を日本の独立リーグが満たすことが，リーグ自体の存在価値を高め，さらには新たな収益の手段となる可能性をもっていることが窺えた。

このような外国人選手の受け入れは，エージェントを通して行われることが多いのだが，その結果，逆の選手フロー，つまり日本から未だ競技レベルの低い新興の冬季リーグへの選手派遣という選手の国際移動を生んだ。独立リーグの選手のほとんどは，さらに上位のプロリーグへの移動を目標として，低賃金で不安定な季節雇用に甘んじている。彼らの競技生活を脅かす最大の難

点はオフシーズンの雇用とトレーニング，とりわけ彼らに一番必要な実践経験の場の不足なのであるが，その枠が限られているとは言え，冬季プロリーグへの派遣に伴うそこでのプレー経験と雇用は，この難点を解決する一手段となる。このことは，より高いレベルの国内選手を独立リーグに引き込む要因にもなる。

国際交流戦について言えば，日米独立リーグの現状を考えると，移動経費などの点から試合興行によるチケット収入，物販収入のみで収益を挙げることは現実的ではない。しかし，この事業を石川球団は広告収入によって黒字にしている。「国際交流戦」のうたい文句がスポンサー獲得に一役買ったのである。石川球団の方針に BC リーグも追随し，リーグ代表村山哲二は，外国人選手枠の撤廃などを含めた BC リーグ挙げての国際化戦略構想を掲げた[32]。これを受けて，国際交流戦も，2013 年には BC リーグ，ノースアメリカンリーグから各々 2 チームが出場する国際大会に発展する予定である。

今回の国際交流戦のプログラムには「環太平洋リーグ」の言葉も躍っている。独立プロ野球リーグというプロスポーツの規模と現状を考えると，これは現実的ではないだろう。しかし，環太平洋地域にある小規模プロ，セミプロ各リーグの優勝チームによるチャンピオンシップというかたちでなら，海外での事業展開を念頭に置いた地元企業からのスポンサー収入や地元以外の企業からのスポンサー獲得により，ビジネスとして成立しうる可能性をもっている。

とかくスポーツビジネスの場においては「地域密着」が叫ばれる。日本の現状では独立リーグのような小規模プロスポーツビジネスが，NPB のようなメガスポーツビジネスとは共存できる環境にはなく（石原：2011），したがって，事業展開をしうるのは地方ということになる。しかし，疲弊する地方経済を前に，チームやリーグの持続的発展をパイの小さい地方にのみ求めることには確かに無理がある。そのような中，現在試みられている独立リーグの国際化戦略は，小規模スポーツビジネスの将来的な発展に一石を投じるものであると考えられる。

〔注〕

1） 日本の独立プロ野球リーグで，2010 年度決算において BC リーグの 3 球団が黒字化を達成したのが最初である（「地域スポーツノート：独立リーグ考 ①」『朝日新聞』2011. 10. 18）。

2） ドミニカのカープアカデミー出身の彼は，広島球団の育成方針により，初め中国プロ野球リーグ広東球団でプレーし，その後，広島球団からの派遣というかたちで 2007 年からアイランドリーグでプレーしていた。2009 年シーズン後半は育成選手として二軍でプレーし，2010 年シーズンを迎えるに際しては正式な契約選手として支配下選手登録された。

3） 日本人選手としては，2006 年に多田野数人（徳島），2010 年に伊良部秀樹（高知），2011–12 年に高津臣吾（新潟）が日本の独立リーグでプレーしている。

4） 関西独立リーグに関しては，2010 年シーズン途中より選手への報酬支払いが停止されたままになっており，事実上プロリーグとは言えない状態である。したがって本稿においては，これを調査の対象とはしなかった。

5） 2012 年シーズン，アイランドリーグでプレーした全 118 選手のうち，NPB でのプレー経験をもつ者は 8 人（2012 年より始まった NPB からの育成選手派遣制度による派遣 2 人を含む），BC リーグは全 173 選手のうち 10 人であった。NPB 経験者の数は年々増加の傾向にあるが，それでも両リーグの選手全体の 3.4% に過ぎない。

6） 香川オリーブガイナーズ監督西田真二へのインタビュー（2012.6.17，香川県観音寺球場）。

7） ヨーロッパは野球の普及度の低い地域であるが，この大陸出身のプロ野球選手は北米でも珍しくはない。しかし，そのほとんどについて詳しく見ていくと，ヨーロッパから米国へ幼少時に移住した「ヨーロッパ系米国人」であったり，両親の仕事の都合によりヨーロッパ各国で生まれた米国人であることがほとんどである。近年，MLB がイタリアにヨーロッパ・アカデミーを開設してヨーロッパやアフリカの選手の発掘に着手するようになってきたこともあり，本当の意味での「ヨーロッパ人」野球選手の数は増加してきている。

8） セリエ A は，基本的にはアマチュアリーグで，選手は無給でプレーするが，一部主力選手や外国人選手には報酬が支払われる。また，イタリアにも 2010 年，それまでのトップリーグ・セリエ A を改組するかたちでプロリーグが発足した。

9） BC リーグの規定では，外国人選手，元 NPB 選手を合わせて 1 球団あたり 4 人までしか同時に試合出場できない。

10） 実際，両球団が外国人選手の獲得をする方針にないことは，新潟球団スタッフも述べていた（2012.6.24，石川県七尾城山野球場）。

11） 群馬球団の他，福井球団もこの年，韓国人選手とジンバブエ人選手を獲得している。

12） 群馬球団監督五十嵐章人へのインタビュー（2012.4.22，長野県上田野球場）。

13） 群馬球団代表糸井丈之へのインタビュー（2012.4.22，長野県上田野球場）。

14） 富山球団代表味方健一郎へのインタビュー（2012.7.17，富山県小矢部野球場）。

15） 同上。

16） 外国人選手獲得にかかる輸送コストについては，石川球団も問題視していた。前年において黒字決算を出した同球団だが，2012 年度はわずかながら赤字になる見込みだという。その原因として球団は，シーズン当初採用した外国人選手のほとんどが途中退団したため，航空運賃がピークの時期に帰国させざるを得なかったことを挙げていた（石川球団社長端保聡への電話でのインタビュー，2012.12.3）。

17） ワネル・メサへのインタビュー（2012.7.17，富山県小矢部野球場）。

18） 今回調査した中で，球団スタッフ，選手とも，報酬について明言することはなかった。しかし，規定では選手報酬は 10 万から 40 万円の間となっていること，上限額を手にする選手は NPB でのプレー経験をもつごく一部の選手であること，外国人選手とは言え，日本人選手に比べて高い報酬を手にしているわけではないことから，そのほとんどがマイナーリーグでの経験しかない日本の独立リーグの外国人選手の報酬は月 10 万円から 10 数万円と推測される（BC リーグ球団スタッフへのインタビュー，2012.6.24，石川県七尾城山野球場）。

19） ワネル・メサへのインタビュー（2012.7.17，富山県小矢部野球場）。

20） この調査は，石川球団の主催試合会場（2012.6.24，石川県七尾城山野球場）で複数の観客にインタビューを実施して行なった。

21） 彼の話すところでは，ウィンターリーグの各リーグの月給は，プエルトリコで 600 ドル，ドミニカで 700 ドル，メキシコ，ベネズエラで 1000 ドルというものだった。これにプエルトリコ以外は住居と試合前後の食事も球団から提供されていたという（スティーブン・ハモンドへのインタビュー，2012.6.24，石川県七尾城山野球場）。

22） 石川球団社長端保聡へのインタビュー（2012.6.24，石川県七尾城山野球場）。

23） 日米独立リーグ球団による国際試合は過去にも実施されている。2006 年に北米独立リーグの人気球団セントポール・セインツ（ノーザンリーグ）が来日し，アマチュアクラブチームの他，アイランドリーグ選抜チーム，徳島インディゴソックスと交流戦を実施した。

24） リーグ代表村山哲二へのインタビュー（2009.10.18，群馬県藤岡球場）。

25） 高知球団オーナー北古味鈴太郎へのインタビュー（2011.9.19，高知県越知町民総合運動場）。

26） 石川球団社長端保聡へのインタビュー（2012.6.24，石川県七尾城山野球場）。

27） 石川球団社長端保聡への電話でのインタビュー（2012.12.3）。

28） 2012 年シーズン終了後も，BC リーグからは 8 人の選手がコロンビア冬季リーグに参加した。

29） この数字はこのリーグにおいては比較的高いものである。このリーグの最低報酬は月 800 ドルであったという。

30） この派遣プランに参加した選手のひとりは，給与面だけを考えれば，オフシーズンにすることになっていたアルバイトの方が好条件だったとコメントしている（富山球団投手〔当時〕・坂間悠希へのインタビュー，2012. 7. 17，富山県小矢部野球場）。

31） 石川球団社長端保聡へのインタビュー（2012. 9. 11，金沢市営球場）。

32） 第 21 回日本スポーツ産業学会シンポジウム「ヒトのつながりによるスポーツのイノベーション」における発言（2012. 7. 14）。

〔参考文献〕

Agergaard, Sine（2008）. Elite Athletes as Migrants in Danish Women's Handball, *International Review for the Sociology of Sport,* 43, 5–19.

Bale, John & Maguire, Joseph（eds.）（1994）. *The Global Sports Arena: Athletic Talent Migration in an Interdependent World,* Frank Cass.

Chiba, Naoki（2004）. Pacific Professional Baseball Leagues and Migratory Patterns and Trends: 1995–1999, *Journal of Sport & Social Issues,* 28, 193–211.

石原豊一（2008）「ベースボール拡大の諸相：イスラエルプロ野球にみるスポーツ産業のグローバル化」，『スポーツ産業学研究』18（2），1–21.

――――（2011）「日本におけるプロ野球マイナーリーグの持続的モデル構築に向けて：野球ビジネスの日米比較から」，『スポーツ産業学研究』21（1），73–84.

――――（2012a）「公共財としてのマイナーリーグ：日本における独立野球リーグの持続的なビジネスモデル構築への提言」，『岐阜経済大学論集』45（3），151–166.

――――（2012b）「ベースボールにみるグローバル化（3）：北米野球のリロケート先としてのオーストラリア」，『立命館国際研究』25（1），185–205.

――――（2013a）『ベースボール労働移民：メジャーリーグから「野球不毛の地」まで』，河出書房新社

――――（2013b）「グローバル化する新興プロ野球：「野球不毛の大陸」への橋頭堡としてのイタリアプロ野球」，『スポーツ産業学研究』23（1），107–118.

Abstract

A Consideration of Business Model of Local Professional Sport:
From 'Community-based' Business to 'Global Strategy'

by
ISHIHARA, Toyokazu

The word of 'community-based' recently captures the spotlight in the field of sport business. That trend is the same in Japan where deployment of small scale professional sport business is becoming popular these days.

However, it is not verified enough if the community-based business model is effective in the small local market in Japan. This paper introduces some examples of the global strategies by the independent professional baseball league in Japan that is in the opposite pole with community-based marketing deployment, and shows that not only inward community-based strategies, but also outward global strategies have possibilities for success of the small scale professional sport business.